

原著論文

キルケゴールにおける実存伝達の教育

Education as Existential communication in the thought of

S. Kierkegaard

伊藤 潔志¹

Kiyoshi Ito

キーワード: 主体性、間接伝達、実存哲学、自己教育、教育関係

Keywords : Subjectivity, Indirect communication, Existential philosophy, Self-education, Educational relationship

要旨

キルケゴールの人間理解の本質は、主体性にある。主体性の思想は、キリスト教とは無関係に成り立つ人間理解である。これは、キリスト教と切り離しえないキルケゴールの人間理解の中に、主体性という普遍的価値を持つ思想が含まれているということである。この人間理解に立ってキルケゴールは、自らのキリスト教思想を読者に伝達しようとした。そして、その伝達の内容の特殊さゆえに、伝達の方法に細心の注意を払った。キルケゴールの人間理解は不断に自己教育していく人間であり、キルケゴールが目指す人間関係は相互の単独性を承認し合った上に成立する教育関係である。そして、間接伝達と直接伝達との構造の中で、読者を真のキリスト者へと導こうとした。これは、キルケゴールの著作活動自体が教育的であるとともに、キルケゴールの思想そのものが教育的であることを示している。

Summary

The essence of Kierkegaard's understanding of humans lies in subjectivity. The idea of subjectivity expounds an understanding of humans that holds up regardless of Christianity. What this means then, is that Kierkegaard's human understanding, which is inseparable from Christianity, contains ideas that possess the universal value of subjectivity. Based on his understanding of humans, Kierkegaard attempted to communicate his Christian beliefs to his readers. Due to his distinctive communication, he paid the utmost attention to the mode of such communication. Kierkegaard's understanding of humans is concerned with humans who constantly educate

¹山陽学園短期大学幼児教育学科

Department of Pre-Elementary Education, Sanyo Gakuen College

themselves, and the human relations that he aims at are educational relationships resting on the basis of a mutual recognition of each individual's singularity. Within the framework of indirect and direct communication, he attempted to lead his readers to become true Christians. This suggests that Kierkegaard's literary work itself, as well as his very way of thinking, are educational in nature.

はじめに

本稿は、キルケゴールにおける人間理解と間接伝達に関する研究の一部をなす。本研究では、人間学的・倫理的関心からキルケゴールの人間理解を明らかにするため、その自己生成論・自他関係論・間接伝達論に注目し、考察してきた。本稿では、キルケゴールの自己生成論・自他関係論・間接伝達論を踏まえ、これらを「教育」という観点から再解釈したい。

そもそも、本研究で「教育」という観点を採用したのは、キルケゴールの人間理解の本質に光を当てるためであった¹。キリスト教思想家たるキルケゴールの思想は、その核心とも言うべき宗教性を取り除いて理解することはできない。しかし他方で、その宗教性は、キルケゴールの人間理解の本質を捉えがたくさせているのではないか。これが、本研究の出発点だった。そこで、キルケゴールの「教化(著作活動)」を人間の普遍的な営みである「教育」という観点から捉え直すことによって、キルケゴールの人間理解の本質に接近しようというのが、本研究が採用した方法である。

本研究では、この研究方法を「教育倫理学的方法」と呼ぶ。これは、従来のいわゆる「教育哲学」とは一線を画する。それゆえ、実際の教育にどのように適用できるのかという問題から離れてキルケゴールの思想と対峙する。しかし、応用倫理学の一部門である教育倫理学を方法論として採用している以上、現実の教育に関心を持たないということではない。キルケゴールの人間理解の本質に基づいて、キルケゴール思想そのものが教育的な機能を有していることを明らかにするのが、本研究のもう一つの目的である。

教育倫理的にキルケゴールの思想に接近するとき、最も重要になる概念が主体性である。キルケゴールは、主体性を読者に伝達しようとした。キルケゴールの仮名著作は読者に主体性を伝達するためのものであり、仮名形式とは読者の主体性を損なわないための伝達方法だったのである。したがって、キルケゴールにおける主体性の思想は、キルケゴールの思想を特徴づけるに止まらず、その思想の伝達方法をも規定していたと言える。

キルケゴールにおける主体性の思想は、「主体性は真理である」という言葉に集約される。しかし、主体的真理と客観的真理とは無関係ではあるが、互いに排除し合うものではない。主体的真理は人間の倫理的・実存的な在り方に関する真理であり、客観的真理は認識における真理である。したがって、伝達する真理は、主体的真理か客観的真理かの二つに分けられる。

その際、主体的真理は間接伝達によって伝達される。キルケゴールにおいてそれは、仮名形式の審美的著作によって担われている。他方で、キルケゴールは実名の宗教的著作も残しており、仮名著作と実名著作とは二重性の構造をなしている。すなわち、仮名著作によって自称キリスト者の下まで降りていって実存的な覚醒を促し、実名著作によってキリスト教的真理を提示するのである。

つまり仮名著作と実名著作とは弁証法的な関係にあるのだが、そこには常に主体性の問題が横たわっている。すなわち、① 真理には客観的真理だけではなく主体的真理も存在し、② 主体的真理は直接伝達することができず、③ 客観的真理も主体的真理が伝達されて初めて伝達されう

る。そして何より、④ 伝達は一貫して読者の主体性を尊重しながら行われている。これは、すぐれて教育倫理的な問題である。

本稿では、このような理解を踏まえて、次のように議論を進める。まずⅠでは、自己生成論・自他関係論・間接伝達論に関するキルケゴールの基本思想をまとめる。次にⅡでは、それを教育倫理的に考察していく。そして、キルケゴールの思想そのものがすぐれて教育的であったことを明らかにしたい。

I 人間理解と教育

(1) 自己生成論

キルケゴールの伝達は読者に生成を促すためのものであったが、主体性を尊重するがゆえに、そこで求められている生成は自己生成である。それではキルケゴールは、自己生成をどのように考えていたのか。キルケゴールにおいて自己生成は、懐疑と絶望という否定的なものを契機として

いる。まず懐疑についてであるが、キルケゴールはファウスト研究を通して自らの懐疑を自覚し、ファウストを懐疑の理念だとしている。そのとき懐疑は、デカルトにおけるような思惟・理性の領域だけではなく、実存・精神の領域にも関係している。懐疑は、「在るべき自己とは何か」という問いを提示するが、それによって答えは示されない。しかし、懐疑の徹底は、絶望へと至らしめる。

キルケゴールにおいて絶望は、キルケゴール独自の自己論に基づいて論じられている。キルケゴールにおける自己は、自己関係であり、また自己生成そのものである。そして絶望は、① 自己になっていない状態、すなわち「自己生成の不全」とされる。ただし、② 自己でないという自覚が深まっていくことによって自己に近づいている状態、すなわち「自己生成の過程」でもある。そして、③ 絶望の深化と克服とによって信仰に至るがゆえに、信仰に至るための「自己生成の契機」でもある。

懐疑を経て絶望に至り、絶望を経て信仰に至る。これが、キルケゴールにおける自己生成の過程である。それではその自己生成は、どのような構造にあるのか。それは、自然と歴史という観点から明らかになる。

キルケゴールは、人間の内的直観によって自然を理解しようと言う。これは、キルケゴールが有機体的自然観を採っていることを示している。自然との関係において人間は、内的直観によって自然に顕現する神を捉え、思い煩いを神に投げ委ねることによって神に「集中」されていく。そこで自己は、神によって措定された関係として、自己生成していくのである。

キルケゴールにおける自己生成は、歴史の観点からも捉えられる。生成は、存在における非存在から存在への変化であり、その本質は不変である。そしてキルケゴールは、生成に自由を見出す。それゆえ生成は、自由な人間における自己生成である。そして、その自己生成の過程が歴史である。

それでは、キルケゴールの自己生成論において、自然と歴史とはどのように関係しているのか。歴史的生成は、自然における現実性を生成の可能性として自己の生成の内に含んでいる。この自己の二重化は、自己が自己関係であり、自己生成であることを示している。このとき自己は、まず自然の内に見出される。自然は、自己に自己生成させると同時に、ある限界の中に置く。しかしそこには、自然に規定されきれない新たな生成がある。それが自由であり、ここに主体性に裏打ち

されたキルケゴールの自己生成論の特質を看取することができる。

(2) 自他関係論

自己生成論と間接伝達論とを結ぶブリッジの役割を果たすのが、自他関係論である。しかし、単独者概念に代表されるキルケゴールの思想には、非社会的な思想ではないかという批判がつきまってきた。このような通俗的なキルケゴール理解は、ブーバーのキルケゴール批判に由来するものと思われる。

ブーバーは、自他関係は神との関係と類比されるべきものであって、独白にすぎない自己関係から自他関係は生じえない、と批判する。しかし、キルケゴールにおいて自己とは、神を通して自己と関係する自己関係であった。したがってそれは、自己が語る独白ではなく、神を介して自己と語る対話である。またブーバーは、キルケゴールは公的存在と大衆とを混同し、公的存在にまで背を向けた、と批判する。たしかにキルケゴールは、大衆を痛烈に批判し、単独者の個性・内面性が強調された。しかしそれは、「修正剤」としての役割を果たすために強調された一面でしかない。

それでは、キルケゴール思想の社会性、キルケゴールの自他関係論はどのように示されているのか。それは、隣人愛の思想である。キルケゴールは、隣人愛における自己と他者との関係に、在るべき自他関係を見出した。対象によって愛し方は変わるが、本質的には隣人として愛する。キルケゴールにおける自他関係は、お互いがお互いの単独性を強く認め合うところに成立する。それは、相手の単独性すなわち他者性を強く意識し、認めるということなのである。

これは単独者が社会的存在であることを示しているが、キルケゴール思想の核心が主体性の思想にあることを否定するものではない。キルケゴールは、単独者になって初めて真の自他関係が可能なのであり、またそのような単独者に向かうためには他者との関係が不可欠なのだ、と考えたのである。そしてキルケゴールの間接伝達も、このような自他関係の上に成り立っているのである。

(3) 間接伝達論

キルケゴールの間接伝達は、恋人レギーネに破約の真意を伝えようとしたことを契機に、読者に「いかにしてキリスト者になるか」ということを伝達することを目的として成立した。そうしてキルケゴールは、単独者という概念に結実されていく人間の存在様態へと注意を向けさせようとした。

間接伝達は、イロニーとフモールという二つの局面に分類される。このうちイロニーは、ソクラテスの影響の下に成立した。イロニーは、審美的なもの倫理的なものとの相互の異質性を、矛盾の形で結合させる。つまり、審美的なもの倫理的なものとの矛盾を明確にすることによって、倫理の実存への飛躍を促すのである。そして審美的実存は、イロニーによって反省を迫られ、倫理の実存へと飛躍していく。

しかし、イロニーの立場に終始する限り、決して宗教的実存には至らない。倫理の実存への微行態としてのイロニーは、審美的実存を普遍的なものに導く一方で、その個性性は普遍的なものに取り込まれてしまう。ここにキルケゴールは、宗教的実存までには至らしめないイロニーの限界を見たのである。

そこで、次に登場するのがフモールである。フモールは、ハーマンの影響の下に成立した。宗教的実存(宗教性B)へと導く間接伝達は、フモールである。フモールは、倫理的なものを滑稽なも

のとしてそれに微笑みかけ、その暖かさ・優しさによって宗教的なものを間接的に伝達する。

キルケゴールは、審美的著作においても、明確に伝達目的(真のキリスト者)を抱いている。しかし、それを直接伝達しようとはせず、仮名によって様々な典型を提示し、読者に自己決定による目的への飛躍を促す。このように、具体的な目的を持ちながらも、それを直接伝達せず、目的への促しを重視する。

キルケゴールにおいて、イロニーとフモールとはともに間接伝達であるが、両者は明確に区別されており、伝達の性格も違う。そしてキルケゴールは、宗教的実存に導くフモールを、イロニーの上位に置いた。それゆえ、「教育」という観点から間接伝達論を解釈し直そうとするならば、フモールに注目することになるだろう。宗教的概念であるフモールを教育倫理的に捉え直すことは、換言すれば、キルケゴールの人間理解の本質をフモールの中に見出そうとすることなのである。

II 実存伝達の教育

本節では、前節で見たキルケゴールの思想を教育倫理学的方法で考察していくことによって、キルケゴールの自己生成論・自他関係論・間接伝達論をそれぞれ自己教育論・教育関係論・教育方法論として再解釈していきたい。ただしそれは、キルケゴールの思想を教育に適用しようというものではない。キルケゴールの宗教思想を正面から捉え、その奥に潜むキルケゴールの人間理解の本質を明らかにしようとするものである。したがって本節では、そのためにとりわけ重要だと思われるキルケゴールの宗教的諸概念に注目して、それを起点に考察を進めたい。

(1) 自己教育論

前節の(1)で確認したように、キルケゴールの自己生成論の核心は主体性にある。ただ、これを「教育」の観点から捉えたとっても、主体性を重視する教育それ自体はとりたてて珍しい主張ではない。ここでは、絶望と信仰というキルケゴールの宗教的概念において、キルケゴールの自己生成論を教育倫理的に考察していきたい。

キルケゴールが言う自己生成の過程において注目すべきは、信仰に至る直前まで深化し続ける絶望である。これまで教育学においてキルケゴールの絶望が取り上げられるとき、自己生成の過程としての局面が注目され、自己生成の契機という局面は看過されてきた²。しかしそれでは、絶望していることを自覚していない絶望に戻る方がよいのではないか、という疑問が生じる。つまり、それでは何のための絶望なのか、という本質的な問題が不問に付されることになりかねない。

そこで本稿では、自己生成の契機という局面を第一次的に考えていきたい。そうすれば、絶望に目的という視点を導入することが可能になるからである。一般に、主体性を重視する教育の在り方として「自己教育」・「自己形成」・「自己実現」などが取り沙汰される。しかし、それらが「自分でなす」こと自体に意義を認めようとするものであるならば、それらの先にある積極的な目的・目標やその価値については明らかにされないことになるだろう³。しかし、キルケゴールにおける自己生成は、信仰のための契機である。それゆえ、信仰という確固たる目的があり、「自分でなす」ならばそれだけで有意義なのだ、という類のものではない。

キルケゴールにおいて、自己生成の目的は信仰である。それは、自己生成の契機である絶望の中にも見出すことができる。すなわち絶望には、「信仰へ」という人生の方向性が内在しているのである。信仰という目的は、一般に言われている教育目的の立て方とは明らかに異なるものであ

る。キルケゴールから見れば、一般に言われている教育目的は相対的に規定されており、目的と呼ぶものではない。キルケゴールにおける自己生成の目的は、自己を超えたものに向かう生成なのである。

したがってキルケゴールの自己生成論は、これまで言われてきた「自己教育」などとは異なり、究極的な目的を前提にしつつ子どもの主体性を重視するような教育の在り方と通呈している。このように捉えると、キルケゴールの自己生成論は、キルケゴール独自の「自己教育論」として浮かび上がってくるのである。

(2) 教育関係論

キルケゴールにおいて自他関係は、自己の単独性と他者の単独性とを強く意識する上に成り立っている。各人でありながらただ一人であることを強く意識し、それによって他者の単独性・他者性を強く意識し、それを認める。自己の単独性とは、自己が単独者であるということ、もしくは単独者に向かっているということ、である。そして他者の単独性とは、その他者が単独者であること、もしくは本来その他者は単独者であるべきであるということ、である。このような他者は、その他者を大衆としてではなく隣人として見ることによって現れる。キルケゴールにおける自他関係は、お互いがお互いの単独性を強く認め合うところに成立する。それは、相手の単独性すなわち他者性を強く意識し、認めるということなのである。

それは、人格的關係としての「教育関係」として理解されるだろう。人格的關係とは、お互いに相手の語りかけに耳を傾ける応答的対話関係の上に成立する関係である⁴。自己と他者とは、単独性においてかけがえのない存在として区別され、この区別において人格的關係は可能になる。他者の単独性が曖昧なままでは、他者は誰でも取り換えのきく大衆でしかない。教育的行為が人格的關係において遂行されるべきものならば、キルケゴールにおける自他関係は、他者の単独性を強く意識した、あるべき教育関係と言える

実はキルケゴールの間接伝達も、このような教育関係にあって初めて可能なのであり、またこのような理解の上に立って捉えなければ、その核心を把握したとは言えない。キルケゴールの単独者は、孤立した存在ではなく社会的存在である。しかしこのことは、キルケゴールの思想の核心が主体性の思想にあることを否定するものではない。キルケゴールは、主体的で自由な個人である単独者になって初めて真の教育関係が成立すると考えたのであり、またそのような単独者に向かうためには他者との関係が不可欠なのだと考えたのである。

それゆえにキルケゴールの自他関係論は、すぐれて教育的だと言える。というのも、前項で見たように、キルケゴールの自己教育論は個人の主体性の上に成り立っているからである。すなわち、「教育」という観点から捉えるならば、キルケゴールの自他関係論は正しく教師と子どもとの間における「教育関係論」としても解することができるのである。

(3) 教育方法論

キルケゴールの著作活動は、先に見たような教育関係において読者を自己教育に導こうとした、ひとつの教育実践と理解することができる。それが、間接伝達である。キルケゴールにおける間接伝達は、イロニーとフモールとに分類される。

キルケゴールにおけるイロニーは、ソクラテスの影響の下に成立し、倫理的真理の伝達を担った。そしてフモールは、宗教的真理の伝達を担う伝達方法である。これらの伝達方法の差異は、

伝達の目的・内容の差異に由来する。したがってキルケゴールは、ある一つの有効な伝達方法を開発しようとしたのではなく、伝達の目的や内容に合わせた伝達方法を考えたのである。

このとき、倫理的伝達を担うイロニーは、道德教育の方法として適用できるように見える。しかし、キルケゴールにおいて倫理の実存は、宗教的実存の下位に置かれている。キルケゴールが求めたものは、あくまでも宗教的実存への導き入れであった。そう考えると、注目すべきは、宗教的概念であるフモールだろう。しかし、宗教教育に限定せず教育一般を考えていこうとするならば、キリスト教的真理の伝達を目論んでいたキルケゴールのフモールをそのまま教育に適用することはできない。

そこで、イロニーとフモールの機能を検討して、それを「教育」という観点から再解釈したい。イロニーは、被伝達者を間接的に否定することによって、被伝達者の内面に目を向けさせる伝達方法である。このときイロニーは、倫理的真理という抽象的なものを目的としている。これに対してフモールは、真のキリスト者(宗教性B)という具体的な目的を持っている。

まず、イロニーについてであるが、従来の教育学におけるキルケゴール研究では、教育における伝達理論として、イロニーを重視していた。しかしイロニーは、具体的な伝達の目的を持っていない。これに対して教育には、教育目的がある。それゆえ、教育においてイロニーを重視する理解は、教育が本来はらんでいる有目的性を無視あるいは過小評価した理解だと言える。イロニーは、教育よりもむしろカウンセリングの場面において有効ではないだろうか⁵。カウンセラーは、患者に対して自分で自己に立ち向かうことを促すのみで、患者に具体的な理想の人間像という目的を押し付けたりしないからである。

キルケゴールは、審美的著作において、伝達の目的(真のキリスト者)を抱いている。しかし、それを直接伝達しようとはせず、著作の中で仮名によって様々な典型を提示し、読者に自己決定による目的への飛躍を促す。このように、具体的な目的を持ちながらも、それを直接伝達せず目的への促しを重視する。このようなキルケゴールのフモールは、今日において不可欠な教育方法として捉えられるように思える。なぜなら、現在の教育においては、「生きる力」といった自己決定力が重視されているからである。

自己決定とは、複数の選択肢の中から、自分の意志で選択することである。それゆえ、「～できる知」という目的を直接に教え込むことは、応用力・実践力のない死んだ知識を与えるだけだと否定されている。しかし他方で、教育は「～できるように」という目的設定から逃れることもできない。それゆえ教師は、子ども一人ひとりに対して、あたかも子どもたちが自分で発見したかのように、知(教育内容)を伝達すべきだとされる。つまり、社会が要求する人間像に向かって、子どもの自己決定を促すべきだとされているのである。

教育において求められるものが何よりも子どもの子ども自身による自己決定であるとするならば、その在り方はキルケゴールがフモールによって伝達したことと変わらない。「教化」の方法であるフモールを「教育」という観点から捉えると、実は今日の教育と合致している。キルケゴールのフモールを教育倫理的に見ると、それが現在の教育を先取りしていたことが分かるのである。

そうすると理想の教師は、イロニカーではなくてフモリストとしての教師ということになる。教師フモリストは、子どもの自己決定を重視しながら、決して子どもを放置しない。そして、様々な可能性を子どもに提示し、子ども自身に思考させながら教師が持つ目的へと導いていく。今日、我々に求められている教師も、まさにこうしたキルケゴールが提起したフモリストとしての教師ではないだろうか。

おわりに

以上に議論から分かるように、キルケゴールの思想そのものが教育的性格を有しており、キルケゴールの思想は教育思想である。その意味でキルケゴールは教育思想家であるが、また教育実践家だったとも言える。キルケゴールの人間理解の本質は、主体性にある。主体性の思想は、キリスト教から離れても成り立つ人間理解である。ただし、ここで言う「キリスト教から離れて」というのは、キリスト教を無視するものではない。キリスト教と切り離しえないキルケゴールの人間理解の中に主体性という普遍的価値を持つ思想が含まれている、ということである。

こうした人間理解に立ってキルケゴールは、自らのキリスト教思想を読者に伝達、すなわち教化しようとした。そして、その伝達内容の特殊さゆえに、伝達方法に細心の注意を払った。キルケゴールの人間理解は不断に自己教育していく人間であり、キルケゴールが目指す人間関係は相互の主体性・単独性を承認し合った上に成立する教育関係である。そしてそれを、間接伝達と直接伝達との構造の中で、読者を真のキリスト者(宗教性B)へと導こうとした。これは、キルケゴールの著作活動が教育的であるとともに、キルケゴールの思想そのものが教育的であることを示している。

個人の生き方(実存)に関する教育としては、道徳教育や宗教教育が、真っ先に挙げられるだろう。それらには道徳的知識・宗教的知識の教育はもちろんのこと、道徳心・信仰心に関わる教育も伴われる。こうした教育がある意図を持って他者の価値観に変化をもたらそうとする営みであることは、否定しえない事実である。このことは、道徳教育・宗教教育に限らず、教科教育などにおいても同様である。それゆえ、教育においては他者の主体性の視点が必要であることは、明白である。しかもこの点は、教育学や倫理学が主題とすべき問題である。

教育が他者の価値観に変化をもたらそうとする営みであるならば、教育学はその他者の主体性の問題について敏感でなければならない。倫理学も、善悪について論じるならば、それを論ずること自体の社会性(教育性)、他者の主体性をも問題としなければならない。これらは、教育倫理学の問題である。キルケゴールの思想はこの問題と正面から向き合い、キルケゴール自身もこの問題と格闘したのである。我々は、自己と他者の主体性について、キルケゴールから多くを学ぶことができるだろう。

註

- 1 詳細は、拙論「キルケゴールにおける人間存在と教育」(『山陽学園短期大学研究紀要』第42巻、17～28頁所収)を参照のこと。
- 2 たとえば、諸富祥彦『「実存的自己生成への導き入れ」の方法——S・キルケゴールの所論の検討を中心に——』(日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』第15巻、1990年、19～27頁所収)がある。
- 3 村井実『「善さ」の構造』村井実著作集第3巻、小学館、1988年、249頁を参照のこと。
- 4 千葉泰爾「教育的現実と教育的行為」(同編『教育の本質と目的』福村出版、1991年)144頁を参照のこと。
- 5 諸富祥彦は、哲学とカウンセリングとの関係をめぐって、「実存思想、特に(体系哲学の構築を目指したハイデッガーやヤスパーズではなく)他者を覚醒せしめるための実践的な知恵に富んでいるキルケゴールの実存伝達論の検討から、いかなる臨床的示唆を引き出すことができるか」という問いを提示している(「カウンセリングと哲学(I)——問いの提示——」『千葉大学教育学部研究紀要』第1部、第42巻、1994年、137～147頁所収)145頁)。

またラムズランド(Katherine M. Ramsland, 1953-)は、キルケゴールの間接伝達をセラピストと患者との間において議論しており、教育学的関心から見ても興味深い(cf., Katherine M. Ramsland, *Engaging the Immediate: Applying Kierkegaard's Theory of Indirect Communication to the Practice of Psychotherapy*, Associated University Presses, 1989.)。